

史跡旧二条離宮（二条城）

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇二一―一二

史跡旧二条離宮（二条城）

2022年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

史跡旧二条離宮（二条城）

2022年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、本丸御殿公開整備に伴う史跡旧二条離宮（二条城）の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

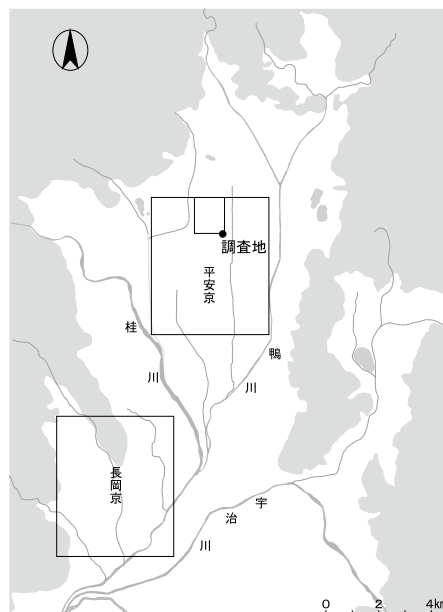
令和4年7月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡旧二条離宮（二条城）
- 2 調査所在地 京都市中京区二条通堀川西入二条城町541番地（二条城敷地内）
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2022年1月11日～2022年3月8日
- 5 調査面積 101.4㎡
- 6 調査担当者 岡田麻衣子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」・「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 岡田麻衣子
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 調査・整理作業にあたり、下記の方々からご教示頂いた。記して謝意を表します。
今江秀史・奥田隆司・来本雅之・曾根義雅（元離宮二条城事務所）、
尾下成敏（京都橘大学）、西山良平（京都大学） （五十音順・敬称略）

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 1区の遺構	5
(3) 2区の遺構	7
4. 遺 物	8
(1) 遺物の概要	8
(2) 土器類	8
(3) 瓦類	8
(4) 金属製品	11
(5) 壁土・葺土	11
5. まとめ	12

図 版 目 次

図版1	遺構	1区実測図(1:60)
図版2	遺構	2区実測図(1:60)
図版3	遺構	1 1区全景(北西から) 2 建物6・礫敷遺構7検出状況(北から)
図版4	遺構	1 柱穴列5検出状況(西から) 2 埋甕15検出状況(北から) 3 2区全景(南東から)
図版5	遺物	出土軒丸瓦・軒平瓦・菊丸瓦
図版6	遺物	1 被熱した壁土・葺土 2 被熱した瓦

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：200）	2
図3	1区調査前全景（南東から）	2
図4	2区調査前全景（北西から）	2
図5	作業状況（北西から）	2
図6	埋戻し状況（北西から）	2
図7	本丸内 既往調査位置図（1：1,200）	4
図8	基本層序（1：30）	5
図9	建物6 柱穴31・32実測図（1：30）	6
図10	出土土器実測図（1：4）	8
図11	出土瓦類拓影及び実測図（1：4）	9
図12	出土金属製品実測図・銭貨拓影（1：2）	11
図13	寛永期絵図と今回の調査位置（1：1,000）	12

表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	8

史跡旧二条離宮（二条城）

1. 調査経過

本調査は、本丸御殿公開整備に伴って実施した発掘調査である。今回の調査地は史跡旧二条離宮（以下「二条城」とする）の本丸御殿北東隅に位置する（図1）。二条城の本丸御殿では平成29年度（2017）から本丸御殿の保存修理を行っており、令和6年度（2024）に敷地内庭園と合わせて本丸御殿の歴史や芸術的な価値を広く伝えることを目的とした一般公開を予定している。これらの計画に伴い、職員詰所やキュービクルを設置する必要が生じた。今回の調査は、これらの諸施設建設候補地における遺構の遺存状況を明らかにすることを目的として実施した。

発掘調査は、元離宮二条城事務所（以下「二条城事務所」とする）から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が令和4年（2022）1月11日より開始した。調査区は、二条城事務所と京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」とする）の協議に拠り、5.5m×6m（33㎡）の調査区を2箇所設定し、北側を1区、東側を2区とした（図2）。調査開始後、一部調査区の拡張を行い、最終的な調査面積は1区が66.6㎡、2区が34.8㎡、合計101.4㎡となった。調査の結果、江戸時代の整地土・建物・礫敷遺構・柱穴列・土坑・埋甕、明治時代の土坑などを検出した。

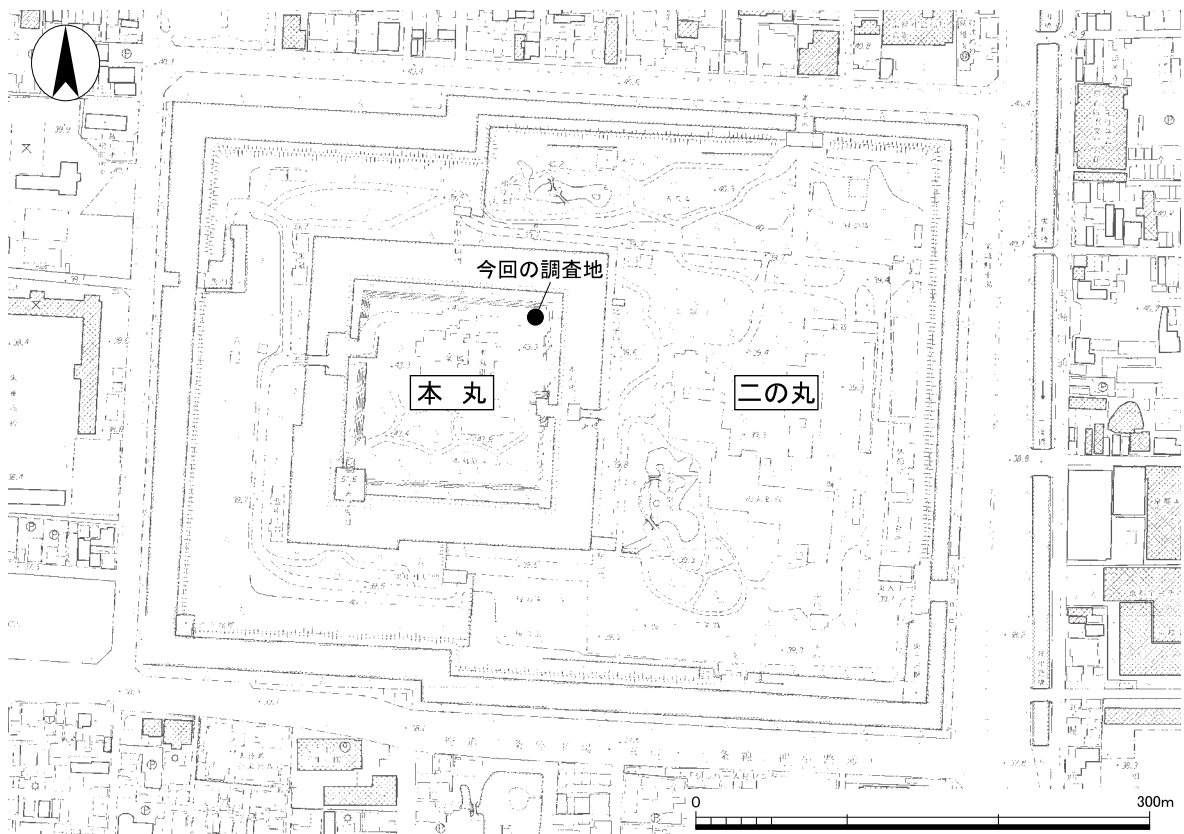


図1 調査位置図（1：5,000）

調査中は適宜、二条城事務所と文化財保護課と協議し、文化財保護課による臨検・指導を受け、
 図面や写真による記録を行った。3月8日に遺構面を砂で保護したのち埋め戻し、終了した。

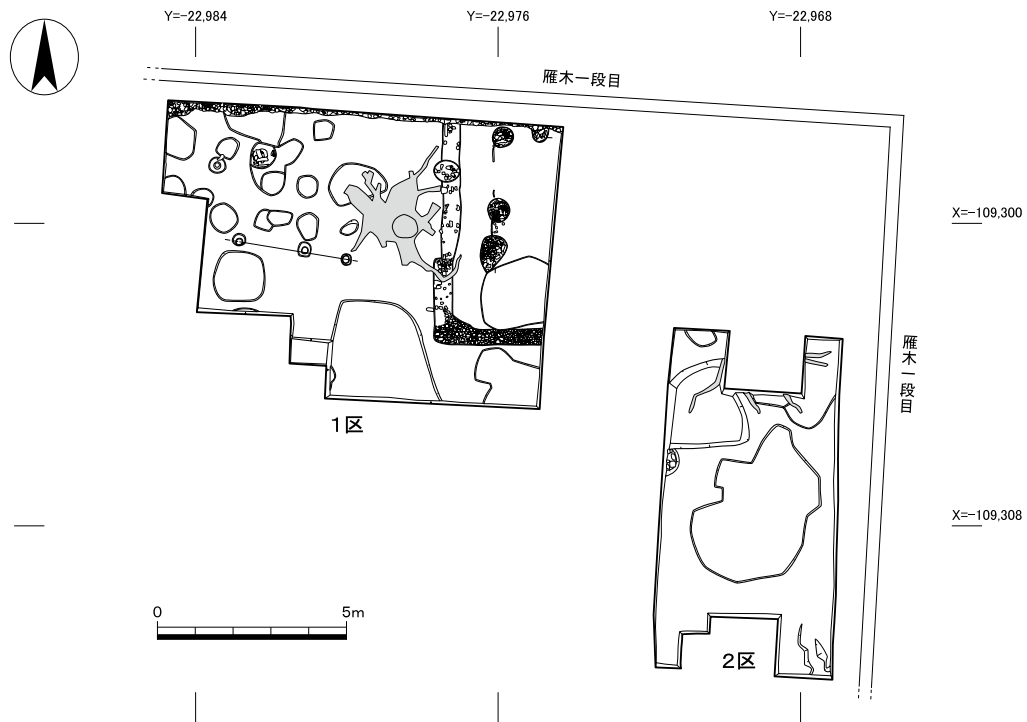


図2 調査区配置図 (1 : 200)



図3 1区調査前全景 (南東から)



図4 2区調査前全景 (北西から)



図5 作業状況 (北西から)



図6 埋戻し状況 (北西から)

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いに勝利し、ほぼ天下を掌握することに成功した徳川家康は、慶長7年(1602)に二条城の造営に着手し、翌年に完成させた。この頃の二条城は、『洛中洛外図屏風』などに描かれた様子から、堀川通を正面に門が開き、堀は一重の方形、五層の天守閣を備えていたと考えられる¹⁾。

寛永元年(1624)には後水尾天皇の行幸に備え、徳川秀忠・家光によって城域を西側へ拡張する大規模な工事が行われた。寛永3年(1626)には新たに天守・本丸御殿・堀・石垣などが普請され、現在の二重の堀と本丸・二の丸を備えた二条城の姿となる。

その後、寛延3年(1750)に落雷で天守が焼失、天明8年(1788)には天明の大火によって本丸御殿をはじめ城内の多くの建物が焼失した。天明8年以降に作成された『二條御城中繪図』²⁾には、天明の大火による焼失状況とともに、その後の再建建物と非再建建物について描かれており、この絵図から本丸内の焼失したほとんどの建物が再建されなかったことがわかる。

文久3年(1863)の徳川家茂の入城から慶応3年(1867)の徳川慶喜による大政奉還までの期間に本丸内の再整備が行われ、その北部には仮御殿が建設された。

明治維新後は太政官代が置かれ、二の丸御殿は京都府庁として使用される。その後、明治17年(1884)に宮内省管轄の二条離宮となり、明治26年(1893)には京都御所の北東にあった桂宮御殿の主要部が本丸内に移築され、本丸御殿となる。

大正4年(1915)には大正天皇即位の大典に伴う整備が行われる。昭和14年(1939)には宮内省より京都市へ下賜され、元離宮二条城となる。その後、文化財保護法の制定により昭和27年(1952)には二の丸御殿6棟が国宝、本丸御殿や東大手門など22棟の建物が重要文化財に指定され、昭和28年(1953)に二の丸庭園が特別名勝庭園に指定される。平成6年(1994)にはユネスコ世界文化遺産「古都京都の文化財」のひとつに登録され、京都を代表する観光地として連日観光客や修学旅行生で賑わっている。

(2) 既往の調査(図7)

二条城内では、これまで20回以上の立会・試掘・確認・発掘調査が行われており、縄文時代から近代に至る各時代の遺構や遺物を検出している。ここでは本丸御殿内の主要な調査について成果概要を記す。

調査1は、2010年に実施された防災施設設置工事に伴う立会調査である。寛永元年の増改築に係る整地土・土坑・石列、天明の大火で焼失した建物の礎石や基礎、天明の大火後の整地土などを検出している³⁾。

調査2は、1980年に実施された防災施設設置工事に伴う立会調査である。江戸時代の瓦溜・石

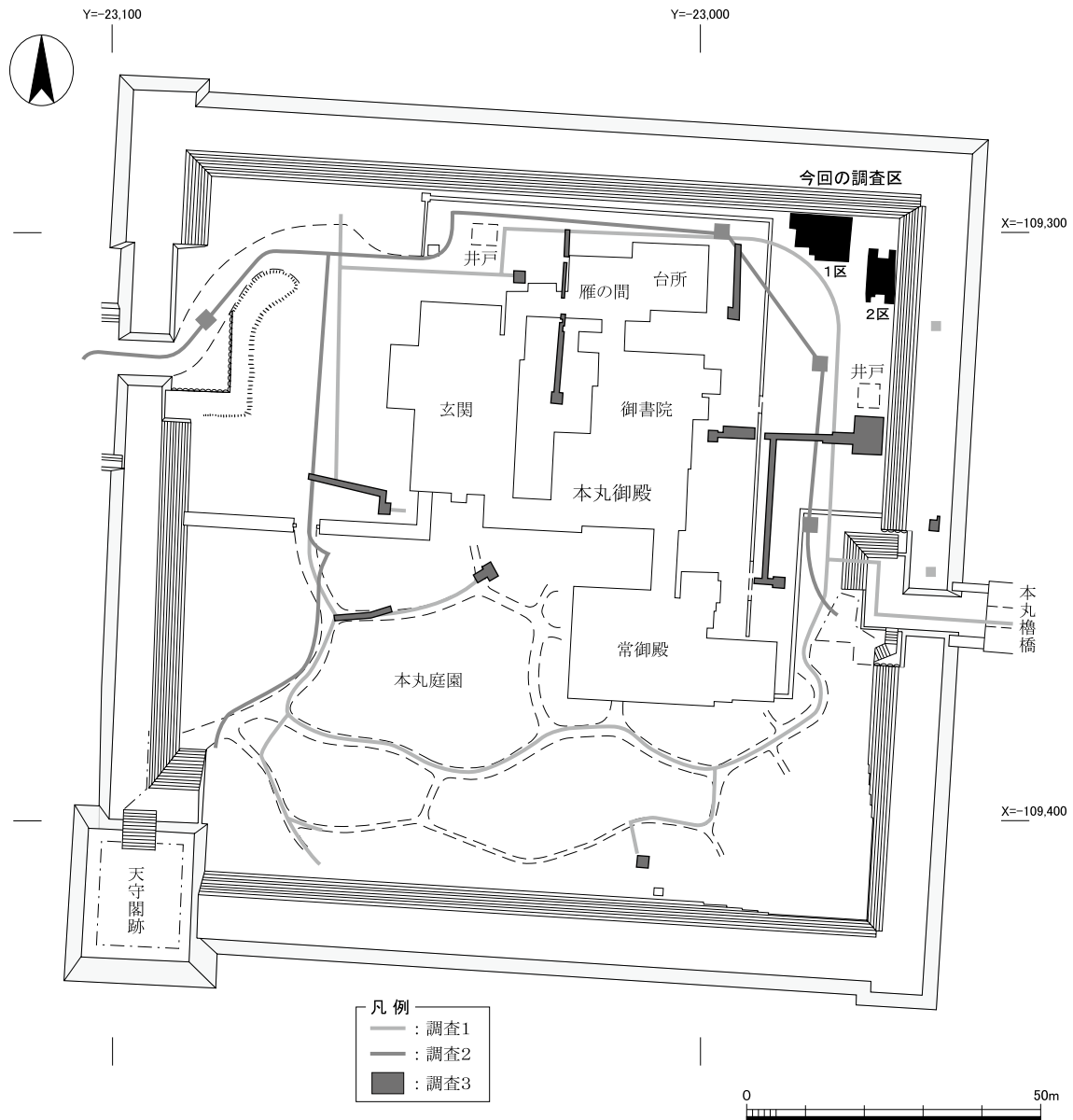


図7 本丸内 既往調査位置図 (1 : 1,200)

列・礎石・石組溝などを検出している⁴⁾。

調査3は、2009年に実施された防災・防犯施設設置工事に伴う確認調査である。寛永元年の増改築に係る整地土・溝・土坑・柱穴・礎石列・集石、天明の大火による火災層などを検出している。寛永元年の増改築に伴う整地土は、二の丸御殿と現地表面の高低差からすると3m以上に及ぶと考えられ、本丸御殿の造営が極めて大規模な工事であったことが明らかとなった⁵⁾。

以上のように、これまでに本丸御殿内各所で小規模な立会・確認調査を行い、二条城造営の経過や寛永元年の増改築、天明の大火による被害などが少しずつ明らかにすることができた。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図8)

調査地における現地表面は、標高約43.0mでほぼ水平である。

調査地の基本層序は、1・2区ともに1～5層に分かれる。1層は表土。2層は粘性の強い橙色シルト。この層は調査区の一部で確認した。3層は被熱した江戸時代前・中期の瓦や壁土・葺土を多量に含む。文献や周辺調査から二条城内の建物が天明8年(1788)の大火によって焼失したことが明らかになっており、焼瓦と焼土はこれに伴うものと考えられる。よって2・3層は江戸時代末期の本丸整備に伴う整地土である。4・5層は周辺の調査成果から江戸時代前期の整地土である。

調査では、4層上面で江戸時代から明治時代の遺構を検出した。江戸時代の遺構のうち、焼瓦・焼土を含む遺構については、天明の大火以降のものと考えた。なお、今回は遺構確認を目的とした調査であったため、遺構の完掘はせず遺構の検出で留めた。4層の厚さと5層上面の標高は一部の遺構を半裁し、確認した。

4層の厚さと5層上面の標高は一部の遺構を半裁し、確認した。

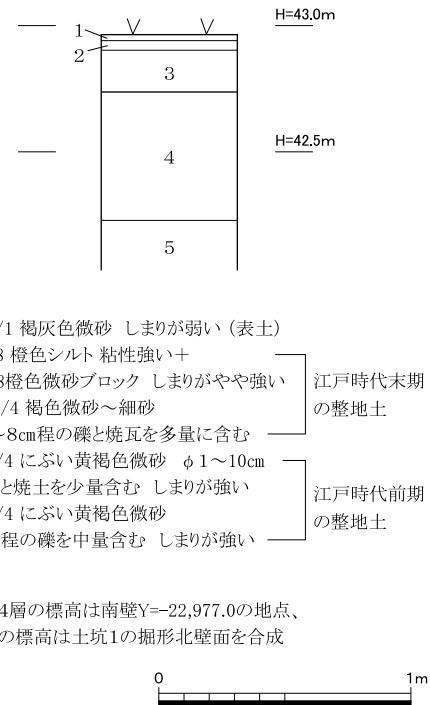


図8 基本層序 (1:30)

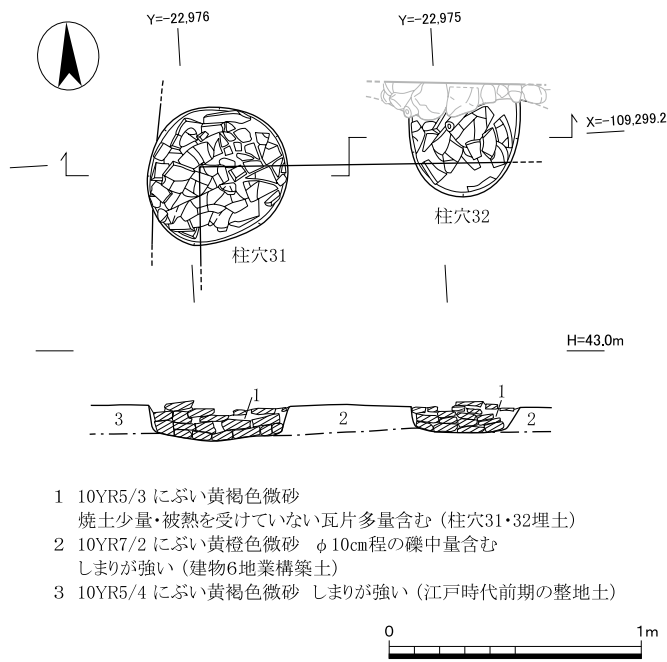
(2) 1区の遺構 (図版1・3)

江戸時代

建物6 (図9、図版3) 北東隅で検出した建物である。検出規模は南北3.9m、東西1.45m。柱間は約1～2m。南側は土坑3に削平され、東側は調査区外へ延長する。方位はほぼ正方位。柱穴31～34の平面形は円形または楕円形を呈する。検出規模は径0.45～1m。確認のため、柱穴31と32を半裁した。いずれも深さは0.14m。埋土に多量の瓦小片が詰められ、少量の焼土を含む。柱穴31・33・34の上面はわずかに凹んでおり、礎石などを据えた痕跡の可能性はある。完掘していない

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代	建物6、礫敷遺構7、柱穴列5、土坑1・23・24・25・26、埋甕15、集石29	
明治時代	土坑3・9	



- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色微砂
焼土少量・被熱を受けていない瓦片多量含む(柱穴31・32埋土)
- 2 10YR7/2 にぶい黄橙色微砂 φ10cm程の礫中量含む
しまりが強い(建物6地業構築土)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂 しまりが強い(江戸時代前期の整地土)

図9 建物6 柱穴31・32実測図(1:30)

ため詳細は不明であるが、地業は建物部分全体を一定の深さまで掘り下げ、中の土を固く叩き締めている。瓦を小端立ててならべた箇所を確認したが、溝状掘形は確認できなかった。遺物は被熱を受けていない江戸時代の瓦の小片が出土した。

礫敷遺構7(図版3) 北東部で検出した。溝状の掘形に礫を充填する遺構である。検出規模は南北5.8m、東西2.9m、礫敷の幅は0.35～0.7m。L字状に建物6の周囲を巡り、北端と東端は調査区外へ延長する。1～5cm程の礫や瓦の小片を固く敷き詰めた上に土を盛る。

柱穴列5(図版4) 西側中央で検出した東西2間の掘立柱の柱穴列である。検出長は3.2m、柱間は1.15～1.75mの不等間隔である。柱穴の平面形は楕円形を呈する。検出規模は径0.25～0.4m。方位は東に対して南に9度振る。柱穴の掘形および柱痕跡の埋土に焼土を含む。遺物は出土していない。

土坑23 北側中央で検出した。平面形は不整形を呈する。検出規模は南北1.15m、東西1.6m。埋土に少量の焼土を含む。遺物は被熱を受けていない江戸時代の瓦の小片が出土した。

土坑24 北側中央で礫敷遺構7と重複して検出した。平面形は楕円形を呈する。検出規模は南北0.6m、東西0.7m。埋土に少量の焼土を含む。遺物は被熱を受けていない江戸時代の瓦の小片が出土した。

土坑1 南側中央で検出した。平面形は不整形を呈する。検出規模は南北2.6m、東西3m。南側は調査区外へ延長する。埋土に多量の焼土を含む。遺物は江戸時代前期から中期の焼瓦が出土した。

埋甕15(図版4) 北西部で検出した。平面形は不整形を呈する。検出規模は南北0.7m、東西0.7m。中央には江戸時代後半の甕が据えられる。埋土に多量の焼土を含む。遺物は江戸時代の焼瓦や焼締陶器甕などが出土した。

明治時代

土坑3 東端中央で検出した。平面形は不整形を呈する。検出規模は南北2m、東西1.7m。東側は調査区外へ延長する。埋土に多量の焼土を含む。遺物は江戸時代前期から中期の焼瓦などが出土した。

土坑9 北西隅で検出した。平面形は不整形を呈する。検出規模は南北1.15m、東西0.8m。西

側は調査区外へ延長する。埋土に多量の焼土を含む。遺物は江戸時代前期から中期の焼瓦などが出土した。

(3) 2区の遺構 (図版2・4)

江戸時代

集石29 中央西壁際で検出した。検出規模は南北0.75m、東西0.35m。直径0.1～0.15m程の礫を並べた上に土を盛り上げる。遺物は出土しなかった。

土坑25 中央で検出した。平面形は不整形を呈する。検出規模は東西3.5m、南北4.25m。埋土に多量の焼土を含む。遺物は江戸時代の焼瓦が出土した。

土坑26 北西側で検出した。平面形は不整形を呈する。検出規模は南北2.35m、東西2.25m、深さは0.3mである。埋土に多量の焼土を含む。遺物は江戸時代の焼瓦などが出土した。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

今回の調査では、整理コンテナにして13箱の遺物が出土した。出土した遺物は、土器類・瓦類・金属製品などがある。その大部分は瓦類が占め、その他の種類は少ない。時代別では、江戸時代の遺物が大半を占め、明治時代の遺物のごくわずかに出土している。

以下、主要な遺構から出土した遺物について種類ごとに概要を述べる。

(2) 土器類 (図10)

土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付などがある。江戸時代のものが大部分を占める。

1は施釉陶器碗の底部である。内面には白釉が施される。高台は削り出し。高台内に墨書がある。⁽⁶⁾色調は淡黄色を呈する。京都産。時代は江戸時代に属する。2区江戸時代末期の整地土より出土した。

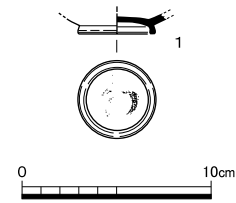


図10 出土土器実測図 (1 : 4)

(3) 瓦類 (図11、図版5)

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棧瓦・菊丸瓦・輪違瓦などがある。

1・2区江戸時代末期の整地土より被熱した瓦が多量に出土した。焼瓦は燻しが取れ、大きく焼歪んだものが多い (図版6-2)。

軒丸瓦 (2・3) 軒丸瓦の瓦当文様はすべて右巻きの三巴文で周囲に珠点を配する。

2は巴文の尾が離れる。調整は瓦当裏面は丁寧なナデ、外周はヨコナデ、丸瓦部凸面は当具によるヨコナデ。被熱により赤褐色を呈する。1区江戸時代末期の整地土より出土した。被熱していることから江戸時代中期以前に属すると考えられる。

3は巴文の尾が接する。調整は瓦当裏面は丁寧なナデ、外周はヨコナデ。1区江戸時代末期の整

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、瓦類、金属製品、銭貨、壁土、葺土		施釉陶器1点、瓦類17点、金属製品3点、銭貨1点、焼瓦一括、壁土一括、葺土一括		
明治時代以降	染付				
合計		17箱	22点 (5箱)	13箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より5箱多くなっている。

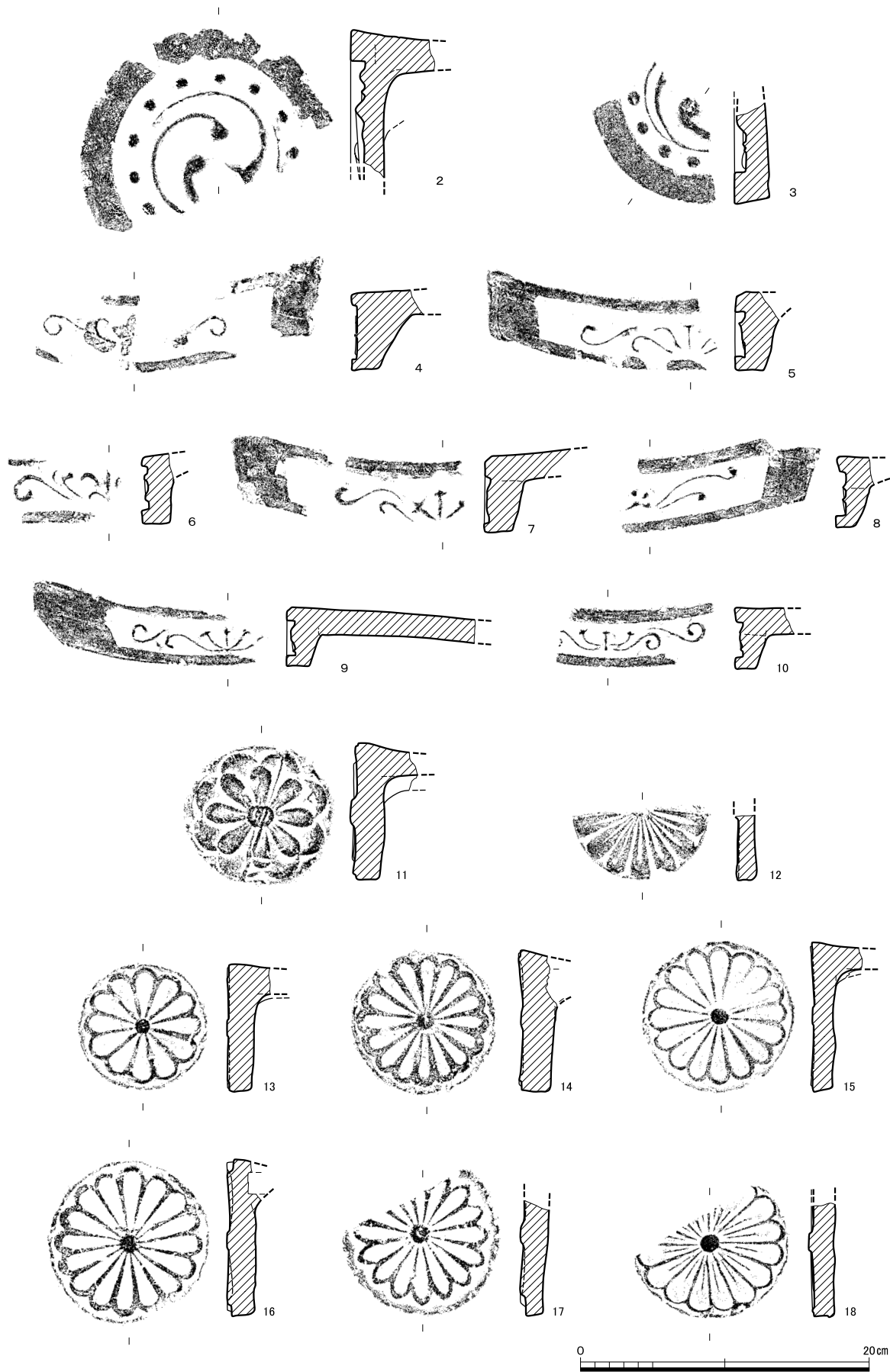


図11 出土瓦類拓影及び実測図 (1 : 4)

地土より出土した。江戸時代に属する。

軒平瓦（4～10） 出土した軒平瓦の瓦当文様は、すべて唐草文であった。時期を細かく分けることができないが、瓦当の貼り付け角度が鈍角で胎土が粗い瓦（4～6）と瓦当の貼り付け角度が直角または鋭角で胎土が緻密な瓦（7～10）に大別することができる。時期は前者よりも後者の方が時代が新しい。前者は安土桃山時代まで遡る可能性があり、後者は江戸時代中期以前と考えられる。また、小片のため図化できなかったが、江戸時代後期の瓦もごくわずかに出土している。被熱は受けておらず、燻しも残存している。

4は簡略化された唐草文、中心に桔梗文に葉を飾る。瓦当部分は貼り付け。調整は瓦当裏面・外周ともにヨコナデ、平瓦部凹面は丁寧なヨコナデ。全体を燻す。1区江戸時代末期の整地土より出土した。

5は簡略化された唐草文、中心に細い三つ葉を飾る。瓦当部分は貼り付け。調整は瓦当裏面・外周ともにヨコナデ、平瓦部凹面・凸面ともに丁寧なヨコナデ。被熱により赤褐色を呈する。1区土坑1より出土した。

6は中心に三つ葉を飾る。瓦当部分は貼り付け。調整は瓦当裏面・外周ともにヨコナデ。被熱により赤褐色を呈する。1区江戸時代末期の整地土より出土した。

7は太い唐草文、中心に太い三つ葉を飾る。瓦当部分は貼り付け。調整は瓦当裏面・外周ともにヨコナデ、平瓦部凹面はナデ。瓦当表面にはキラコを施し、全体を燻す。1区江戸時代末期の整地土より出土した。

8は長く緩やかに伸びた唐草文、中心に珠点を飾る。瓦当部分は貼り付け。調整は瓦当裏面・外周ともにヨコナデ。全体を燻す。1区表土より出土した。

9は簡略化された唐草文、中心に細い三つ葉を飾る。瓦当部分は貼り付け。調整は瓦当裏面・外周ともにヨコナデ、平瓦部凹面は丁寧なヨコナデ、凸面はヨコケズリ。全体を燻す。1区江戸時代末期の整地土より出土した。

10は簡略化された唐草文、中心に細い三つ葉を飾る。瓦当部分は貼り付け。調整は瓦当裏面・外周ともにヨコナデ、凹面は丁寧なヨコナデ、凸面はヨコケズリ。全体を燻す。1区江戸時代末期の整地土より出土した。

菊丸瓦（11～18） 被熱したものが多く、江戸時代中期以前のものと考えられるが、時期を細かく分けることはできない。文様については、間弁を配する八弁花文のA類（11）、陽刻で単弁十四弁花文のB類（12）、花卉が接する単弁十二弁花文のC類（13）、花卉が接する単弁十六弁花文のD類（14～18）に大別することができる。A・B類は瓦当が厚く、胎土が粗い。対してC・D類は瓦当が薄く、胎土が緻密である。時期はA・B類よりもC・D類の方が新しいと考えられる。

11の調整は瓦当裏面・外周はナデ、凸面はタテナデ。被熱により赤褐色を呈する。1区江戸時代末期の整地土より出土した。

12の調整は瓦当裏面・外周はナデ。被熱により赤褐色を呈する。2区江戸時代末期の整地土より出土した。

13の調整は瓦当裏面・外周はナデ。被熱により赤褐色を呈する。1区江戸時代末期の整地土より出土した。

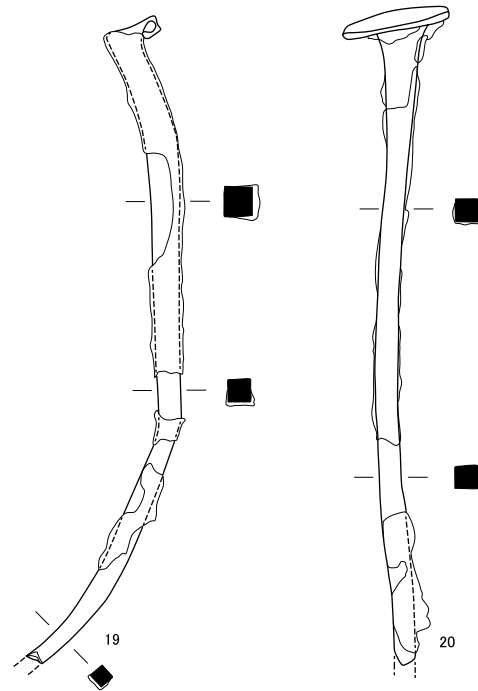
14の調整は瓦当裏面・外周はナデ。被熱により赤褐色を呈する。1区江戸時代末期の整地土より出土した。

15の調整は瓦当裏面・外周はナデ。被熱により赤褐色を呈する。1区江戸時代末期の整地土より出土した。

16の調整は瓦当裏面・外周はナデ。1区江戸時代末期の整地土より出土した。

17の調整は瓦当裏面・外周はナデ。被熱により赤褐色を呈する。1区江戸時代末期の整地土より出土した。

18の調整は瓦当裏面・外周はナデ。1区江戸時代末期の整地土より出土した。



(4) 金属製品 (図12)

鉄釘・鉄滓・鉛弾・銅線・銭貨などがある。

鉄釘 (19・20) いずれも大型で、断面は方形である。19の頭部は折り曲げられ、20は丸く扁平である。重さは19が50.7 g、20が53.4 g。ともに1区江戸時代末期の整地土より出土した。

鉛弾 (21) 被熱を受け、表面は溶け出す。重さは11 g。2区江戸時代前期の整地土上面の遺構検出時に出土した。

銭貨 (22) 文久永寶である。2区江戸時代末期の整地土より出土した。重さは3.6 g。

(5) 壁土・葺土 (図版6-1)

1・2区江戸時代末期の整地土より被熱した壁土・葺土が多量に出土した。著しく被熱を受けて、赤褐色・黒褐色に変色している。

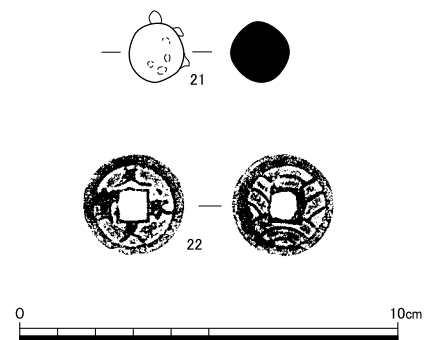


図12 出土金属製品実測図・銭貨拓影 (1:2)

5. まとめ

今回の調査では、江戸時代の建物・礎敷遺構・柱穴列・土坑、明治時代の土坑などを検出した。今回の調査は遺構を完掘していないため、詳細は不明であるが、遺構の時期を大きく3時期に分けることができる。以下、時期ごとに遺構の概要と考察を述べる。

江戸時代後期以前 建物6、礎敷遺構7、柱穴列5、土坑23・24を検出した。これらの遺構は、いずれも埋土に少量の焼土を含むことから、天明の大火後のものと考えられる。

次に検出した建物6・礎敷遺構7について絵図などの記述から考察する。『二條御城中繪圖』の「行幸御殿其外古御建物並当時御有形御建物共」は、寛永3年（1626）以降に描かれたとされ、寛永元年（1624）の後水尾天皇の行幸後に撤去・移築候補となった建物や行幸後も存続した建物など

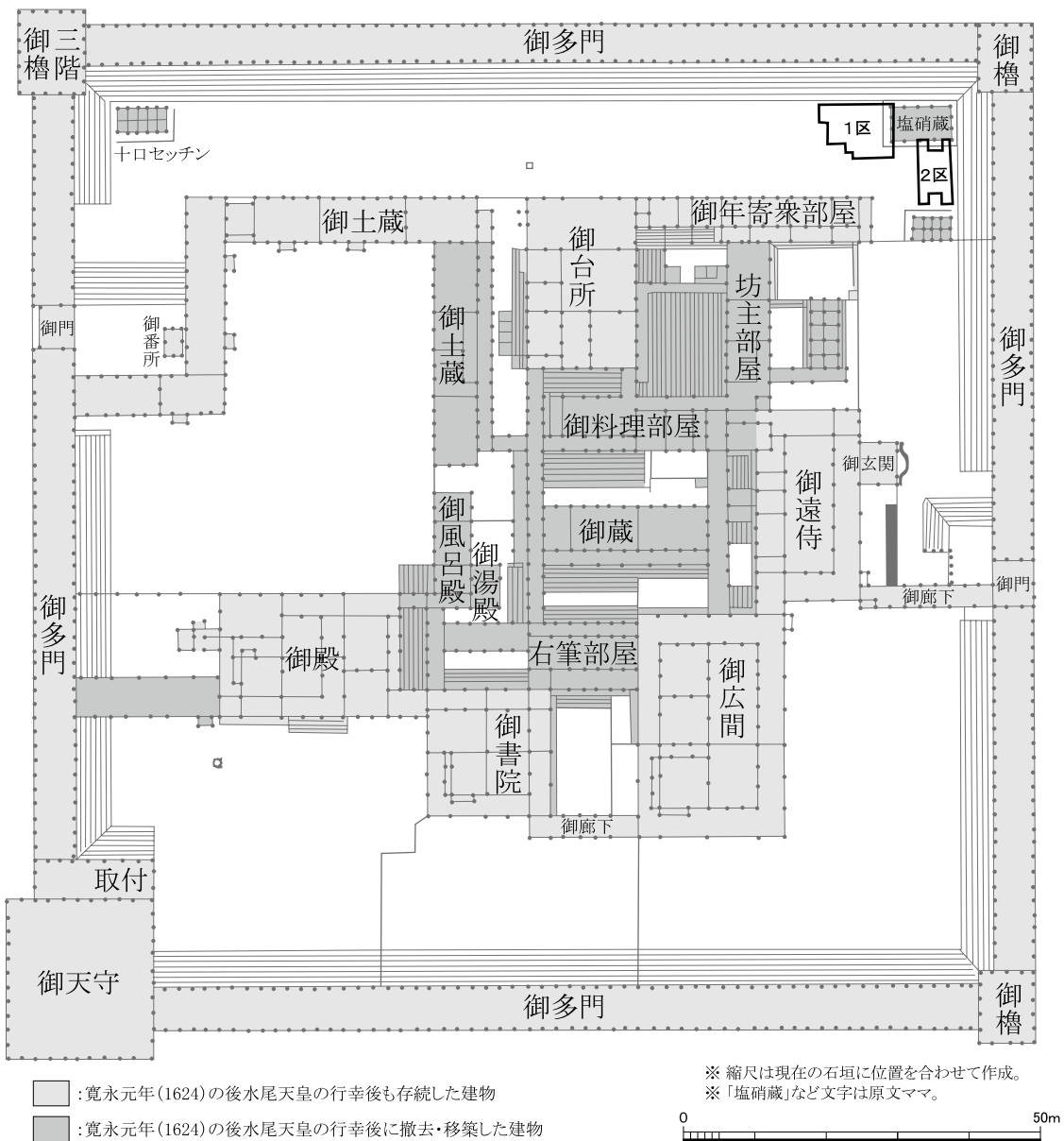


図13 寛永期絵図と今回の調査位置（1：1,000）
『二條御城中繪圖』「行幸御殿其外古御建物並当時御有形御建物共」本丸部分トレース

を色分けして二条城内の建物について描かれている⁷⁾。今回の調査地である本丸の北東隅部には焰硝蔵が描かれており、撤去・移築候補となったことがわかる（図13）。

焰硝蔵とは、一般的に火薬などの爆発物を保管するため、防火性に優れた頑丈な構造の必要があり、石組石敷の構造である場合が多い。例えば大坂城や甲府城、後水尾天皇の行幸後に二条城二の丸に建てられた焰硝蔵などが挙げられ、これらはすべて石組石敷の構造である⁸⁾。

今回検出した建物6や礫敷遺構7は、絵図の焰硝蔵と同位置で検出したが、一般的に石組石敷の構造である焰硝蔵と比較すると簡易な構造をしており、焰硝蔵の下部構造とは考えにくい。性格については、建物6は本丸の北東隅部という場所から主要ではない建物⁹⁾、礫敷遺構7は検出状況などから土堀または建物基礎と考えられる。時期差や併存していたかなどについては、今回確認することができなかった。

江戸時代末期 土坑1・25・26、埋甕15を検出した。これらの遺構の埋土は、いずれも著しく被熱を受けた壁土・葺土や江戸時代前・中期の瓦を多量に含む。層位などの検討によって江戸時代末期の仮御殿建設に向けて行われた整備に伴う遺構と考えられる。天明の大火によって焼け落ちた瓦や壁土・葺土などは撤去され、整地に利用される。土坑1・25・26は廃棄土坑と考えられる。廃棄土坑の上層を整地によって約20cm嵩上げし、その上層に粘性の強い橙色シルトをはっている。1区南側と2区西側では、土間と考えられるタタキ面や礎石を地表面で確認している。

廃棄・整地に利用された多量の焼瓦・焼土・焼け歪んだ金属製品などは、天明の大火によって赤褐色や橙色に変色し、変形している。加えて瓦は燻しが剥落していたり、葺土が溶着したものが多量。これらは天明の大火による火災の激しさを示す貴重な資料である（図版6）。

明治時代以降 土坑3・9を検出した。これらの遺構の埋土は、いずれも著しく被熱を受けた壁土・葺土や江戸時代前・中期の瓦を多量に含むが、層位などの検討によって明治時代以降の整備に伴う遺構と考えられる。明治時代以降に本丸御殿内で行われた整備に、明治26年（1893）の桂宮御殿の移築整備などが挙げられる。

以上のように、今回の調査は調査面積が小規模であったが、天明の大火による被害、絵図などの史料には記されていなかった土地利用、幕末以降の整地など二条城本丸における変遷を考える上で重要な成果を得ることができた。今後も堅実に調査事例を積み重ねていき、二条城の歴史を復元・確認していく必要がある。

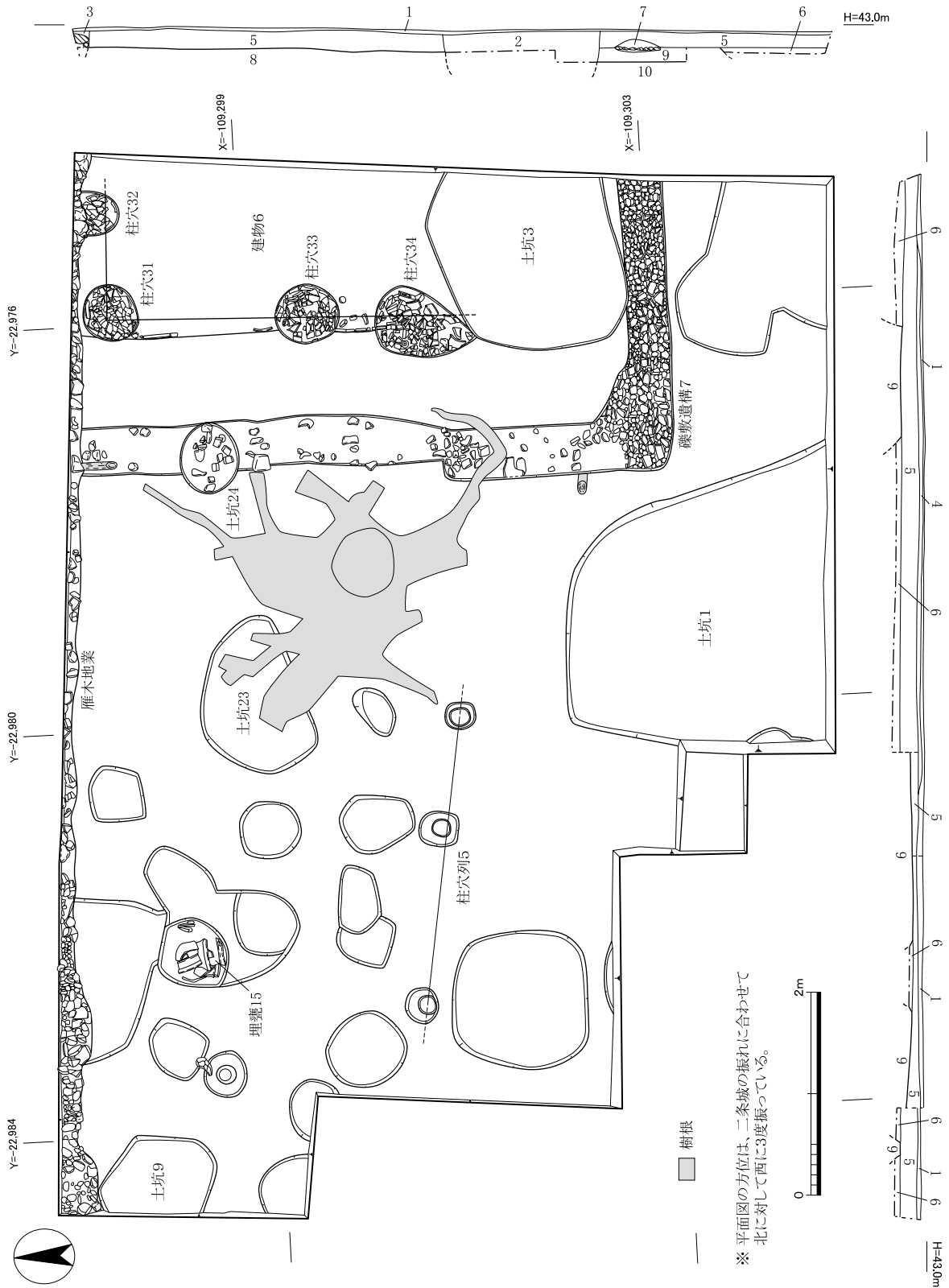
主要参考文献

『史跡旧二条離宮（二条城）保存活用計画』 京都市文化市民局元離宮二条城事務所・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2020年

註

- 1) アデアック「高岡市雲龍山勝興寺 文化財デジタルアーカイブ 洛中洛外図 左隻」
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/1620295100/1620295100200010/mp000010>
(参照 2022-04-08)
- 2) 今回の調査成果を検討する上で参考した絵図は、『史跡旧二条離宮（二条城）保存活用計画』2020年に掲載されているが、細かい文字や表現など確認する際に「京都大学貴重史料デジタルアーカイブ」も参照した。
「京都大学貴重史料デジタルアーカイブ 二条城関係資料」
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/nakai/nijojo> (参照 2022-04-08)
- 3) 2010年の立会調査については、未報告。以下の報告書に成果概要が記される。
近藤章子・モンペティ恭代・吉崎 伸「表1 周辺調査一覧表-16」『史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-19 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
- 4) 「表2 昭和54年度試掘・立会調査一覧表-8」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 5) 山本雅和『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-15 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 6) 墨書土器の判読は、京都大学の西山良平氏と京都橘大学の尾下成敏氏にお願いしたが、特定はできなかった。
- 7) 前掲 2) に同じ
- 8) **大阪城焰硝蔵**
『重要文化財 大阪城 千貫櫓・焰硝櫓・金蔵修理工事報告書 附 乾櫓』大阪市 1964年
大坂城北西部に現在も残存しており、見学することができる。
甲府城焰硝蔵
『甲府城跡Ⅷ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第156集 山梨県埋蔵文化財センター 1998年
二条城二の丸焰硝蔵
「御焰焔蔵梁石掛渡之図」
「京都大学貴重史料デジタルアーカイブ 二条城関係資料」
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/nakai/nijojo> (参照 2022-04-08)
- 9) 建物6の構造に似ている遺構に、礎石と塼を並べた「塼列建物」がある（土山健史「塼列建物について」『関西近世考古学研究Ⅲ』関西近世考古学研究会 1992年）。塼列建物の基底部構造は、礎石の周囲を地覆石の代わりに塼を小端立てて並べる。堺環濠都市遺跡を中心に検出事例が多く、発掘調査報告書では検出された塼列建物の性格を「蔵」と報告するケースが多い。しかし、土山氏はこのことについて、各地の塼列建物の存続時期が比較的短く、蔵として構築されたかは疑問であると指摘している点については注意が必要である。
建物6と同じく、溝状掘形がなく周辺を方形に掘りくぼめて瓦片を小端立てた建物が平安京左京二条四坊十町跡でも検出されている。（上村和直・山本雅和『平安京左京二条四坊十町跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第19冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2001年 2区建物825）

圖 版



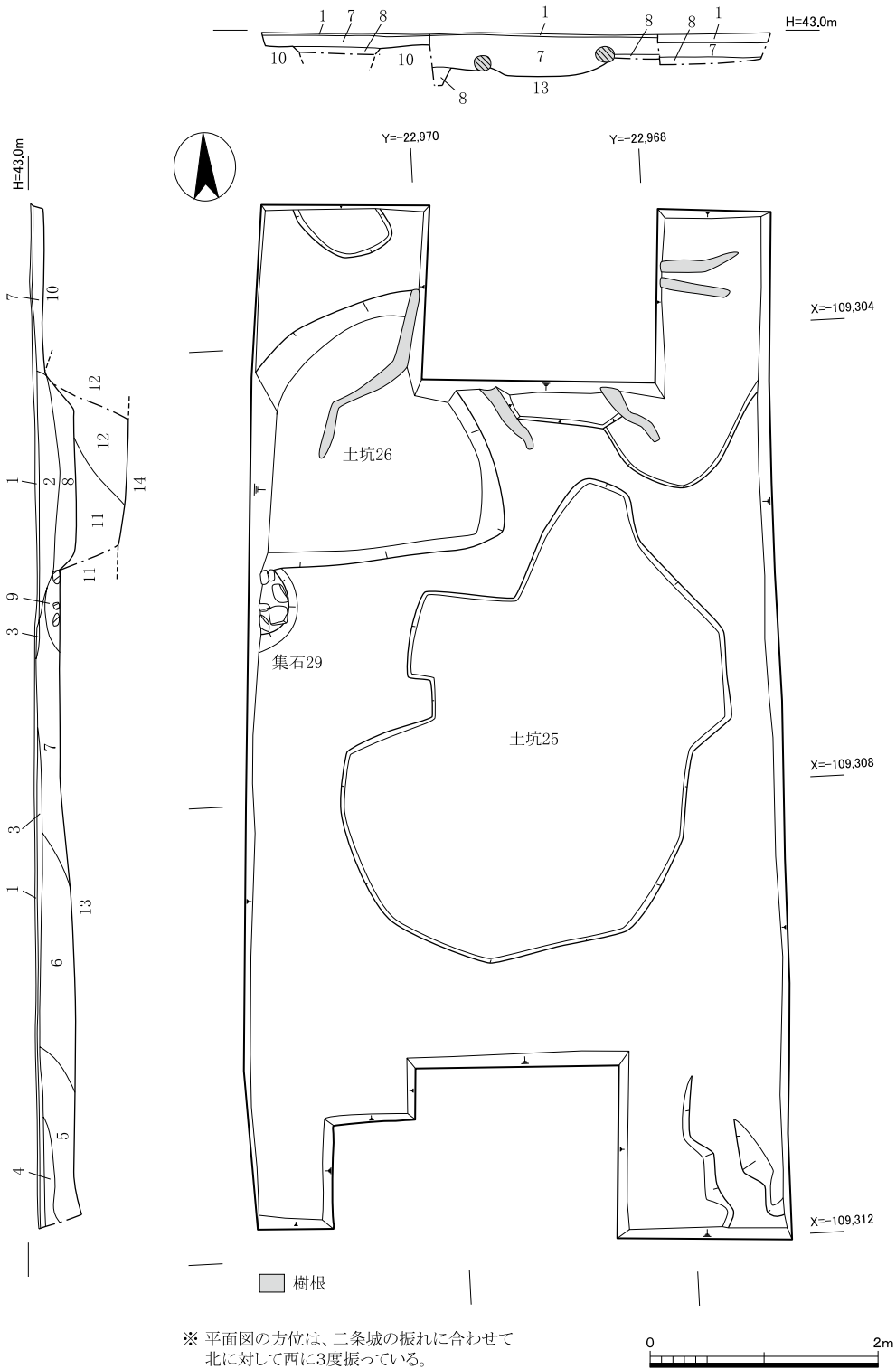
※ 平面図の方位は、二条城の振れに合わせて北に対して西に3度振っている。

- 1 10YR4/1 褐灰色微砂 しまりが弱い(表土)
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色微砂 焼瓦多量含む(土坑3)
- 3 10YR3/1 黒褐色微砂~粗砂
φ 10~20cm程の河原石と凝灰岩多量含む(雁木地業)
- 4 5YR7/8 橙色シルト 粘性強い+
5YR6/8 橙色微砂ブロック しまりがやや強い 江戸時代末期の整地土
- 5 7.5YR4/4 褐色微砂~細砂
φ 0.5~8cm程の礫と焼瓦多量含む

- 6 7.5YR4/6 褐色細砂 焼土と焼瓦多量含む(土坑1など)
- 7 10YR8/4 浅黄橙色微砂 しまりが強い
φ 1~5cm程の礫と瓦小片多量含む(礫敷遺構7)
- 8 10YR7/2 にぶい黄褐色微砂
φ 10cm程の礫中量含む しまりが強い(建物6地業構築土)
- 9 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂 しまりが強い 江戸時代前期の整地土
- 10 10YR7/6 明黄褐色微砂~細砂 φ 1~10cm
程の礫と焼土少量含む しまりが強い

1区実測図(1:60)

図版2
遺構



- 1 10YR4/1 褐灰色微砂 しまりが弱い (表土)
- 2 10YR7/6 明黄褐色微砂 φ0.5~8cm程の礫多量含む
- 3 5YR7/8 橙色シルト 粘性強い+
- 5YR6/8 橙色微砂ブロック しまりがやや強い
- 4 10YR7/6 明黄褐色微砂~細砂 φ1~8cm程の礫中量含む やや粘性あり
- 5 10YR5/2 灰黄褐色微砂 φ10cmの礫と瓦少量含む
- 6 7.5YR4/4 褐色微砂~細砂 φ5cm程の礫と焼瓦多量含む+
- 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロック含む
- 7 7.5YR4/4 褐色微砂~細砂 φ5cm程の礫と焼瓦多量含む

江戸時代末期の整地土

- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色微砂 φ0.5~0.8cm程の礫多量含む (土坑26など)
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂 φ10~20cm程の礫中量含む (集石29)
- 10 10YR7/6 明黄褐色微砂 しまりが強い
- 11 10YR4/4 褐色微砂 φ1~10cm程の礫中量と焼土少量含む
- 12 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂 φ1~10cm程の礫中量と焼土少量含む
- 13 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂 φ1~10cm程の礫と焼土少量含む しまりが強い
- 14 10YR6/4 にぶい黄褐色微砂 φ10cm程の礫中量含む しまりが強い

江戸時代前期の整地土

2区実測図 (1:60)



1 1区全景（北西から）



2 建物6・磔敷遺構7検出状況（北から）



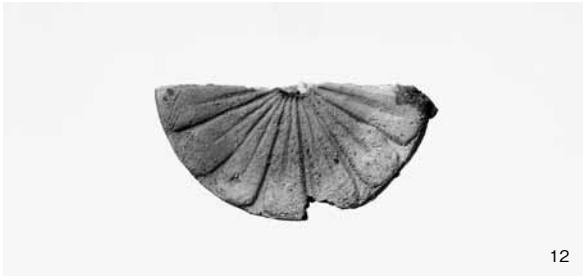
1 柱穴列5検出状況（西から）



2 埋甕15検出状況（北から）



3 2区全景（南東から）



出土軒丸瓦・軒平瓦・菊丸瓦



1 被熱した壁土・葺土



2 被熱した瓦

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせききゆうにじょうりきゆう (にじょうじょう)							
書名	史跡旧二条離宮 (二条城)							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2021-12							
編著者名	岡田麻衣子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2022年7月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせききゆうにじょうりきゆう 史跡旧二条離宮 (にじょうじょう) (二条城)	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 にじょうどおりほりかわにしている 二条通堀川西入 にじょうじょうちよう 二条城町541 ぼんち 番地	26100	A453	35度 00分 52秒	135度 44分 54秒	2022年1月 11日～2022 年3月8日	101.4m ²	本丸御殿 公開整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡旧二条離宮 (二条城)	史跡	江戸時代	建物、礎敷遺構、 柱穴列、土坑、埋 甕、集石	土師器、焼締陶器、施 釉陶器、瓦類、金属製 品、銭貨、壁土、葺土		本丸北東隅部で、 絵図などの史料に ない建物を検出し た。 整地に伴う瓦廃棄 土坑を多数検出し た。		
		明治時代	土坑	染付				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021-12

史跡旧二条離宮（二条城）

発行日 2022年7月22日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961